

息さえ凍る寒気のなかで酷使され、飢餓と望郷にうなされて死の足音を聞いた毎日の生活。ダモイを好餌に民主運動なる思想改造を行い、長年にわたる捕虜の強制労働を国家的制裁として行った社会主義国ソ連の民主運動に卑屈なまでに迎合した日本人の民族性が哀れに思えてなりません。

広島、長崎と並ぶ多数の犠牲者が眠るシベリア。死んでいった元兵士たちの無念を黙殺しているのは一体何でしょうか。日本人の誰もが今一度考え直してみなければならぬ問題だと思えます。

私の歩んだ道と抑留生活

愛媛県 上杉朝生

若かりし頃、私は大志を抱いて商売の道に励んでいた。この頃すでに満州事変、上海事変、昭和十一年二月二十六日青年将校が時の重臣を襲撃する（いわゆる二・二六事件）などして、世相はだんだんと軍国化の

道へと変わりつつあった。一旗揚げようとしていた私の夢は破れた上に、東京日本橋を中心にしてますます暗い時代となってきた。

徴兵検査は第一乙種となった。しかし東京神田の研数学館に学びながら、既に自動車の運転免許を取得するなど常に前向きであったと思う。徴兵検査後、一度郷里の三重県津市に帰り再度上京、その時、満州国、朝鮮、樺太の警察官募集の広告を見た。当時は警視庁で受験することができた。私は旅順、大連を勤務地とする希望もっていたところ、試験場を間違えて朝鮮総督府の試験を受けてしまった。合格発表を聞いてビックリ、係官は笑って京城へゆくように指示された。余談になるが、京城までの旅費を口頭で請求したところ、身元調査のうえ、採用が決まれば京城で旅費が支給される規定のようであった。急遽千葉の兄（高射砲連隊の将校）を訪ね借金を申し入れたところ、兄は他の将校連中の金をかき集めて、「必ず返せよ」と言い、私は昭和十三年の暮れに京城へと旅立った。私は二百人の新生を代表して入校の申告をした。

四カ月の教育を終え、鮮満国境の警察署（昌城警察署）に赴任。その頃ノモンハン事件が起き、日ソ関係が険悪となり、朝鮮在住の憲兵は満州へ移動し始めているらしく、望楼のある村や馬賊が出没する村では襲撃をうけて多数の犠牲者が出るなど、警察官でも第一線で危険の伴う勤務地であった。

二年後、鮮満国境の勤務を終え、新義州の道警察部警務課人事係に席を置いた。昭和十六年十二月には米英に対して宣戦布告。当時、戦況を二十四カ所の警察署へ通報する任務に就きキリキリ舞いの日々でもあった。市内にも召集令状がくるようになったが、私にはうれしい巡査部長に発令された。

新義州の憲兵隊より連絡があり、兄の所属する満州の高射砲隊が新義州駅を通過すること、私は警務課のサイドカーに乗って駅に向かった。駅には北村憲兵軍曹もすでに来ていた。約一時間後に大砲を積んだ軍用列車が進入、兄はこわばった顔をして下りてきた。私は北村軍曹に五メートル程離れてくれと言った。兄と向かい合い、小声で「死ぬなよ、必ず帰って

こいよ」と手を握った。兄はピストル一丁を渡してくれた。私は兄の形見と思って大切に保管することにした。軍用列車は多くの兵隊を乗せ、南へ向かって発車した。

ソ満国境を越えて満州全土を制圧し、更に南下、安東を經由し鮮満国境の大河（鴨緑江）を渡り、新義州を経て平壤に侵攻するソ連軍がある旨の情報を得た。

その頃陸軍の守備隊（一個大隊三百人）は消息不明のため、我々警察官が対応することとなった。八月二十日頃と思うが、すでに日本は降伏しているので「白旗」が必要である。時間はない、警察官という職業柄家へも帰れぬこともあって常に下着類は携行していた。急ぎカバンから「越中ふんどし」を取り出し「白旗」とした。世界広しといえどもふんどしの白旗は上杉一人ではなからうか。

鉄橋を越えてくるソ連軍の最高責任者の名をテレビアンコ少将という。無事新義州空港に送ることができた。空港では野中辰一巡査一人が勤務していた。空港にはすでにソ連軍が到着し、占拠された状態であっ

た。私は野中巡查に直ちに引き揚げるよう指示し、その後私も本署に向かった。神島伸吉署長に報告の後、日本警察と新朝鮮警察の引き継ぎを終え、平安北道の治安維持と「金警部」の前途を祝し、万歳を三唱して解散した。解散後私はバザールを見物して、肝心な八、九月分の給料の受取りを忘れてしまった。

第二次世界大戦は、昭和二十年八月十五日、玉音放送により長かった戦争は終結した。二十年の九月頃、私たちはのんびりと新義州の町を友人と歩行していた、やがて迫り来る運命も知らずに。

暫くして新義州の町内会より治安維持の為の説明会に出席せよとの連絡があり、午前十時頃より三々五々と道庁広場へ集合した。やがて四時頃、四台のトラックがやってきた。若い新朝鮮の軍隊の者が乗っていた。我々を乗せ何の説明もなしに発車した。どこへ行くのか分からない。トラックは大きな鉄の門の前でとまった。車ごと門内に入ると、更に驚いたことにここは刑務所の中であった。

夕方の六時頃、広場で真っ裸にされ、代わりに真っ

赤な一重のシャツを着せられた。まさに天地逆転とはこのこと、実に哀れな姿となった。一部屋に二十五人ほどが収容され、通路には銃をもったソ連兵と朝鮮兵が一人ずつ腰掛けに座って監視している。

秋とは言え蒸し暑く、特に部屋の中にある便器が臭くてたまらない。それに追い打ちをかけるように南京虫の攻撃である、夜中にあばれて朝になるとピタリと姿を消す。

真っ暗がりの中、大豆入りの給食後には各部屋から悲鳴が聞こえる、パン、パン、パシッと音がする。特に旧道警の刑事部や經濟部の人がやられているらしい。「許して下さい」と各所から声がする、相当苦しめられているようだ、何が治安維持のために集まったのか……。

一人の警務官が私を呼び出した、次は自分と覚悟を決めて同行した。コンクリートの土間に立たるとき、十メートル余り先に「ネンネコ」に赤ん坊を背負った女性がいる。何と妻のフジ子と生後二カ月の長男ではないか。兵隊（刑務官）は近くにいるが横を向いたまま

である。しばらくして「私は本部（警務部）で給仕をしていた金です」と名乗った。私はびっくりした。「近く日本に帰れますから逃げないで下さい」と言われて別れた。

連日の雨でぬかるんでいた。三合里で人選されて延吉に向かった。

延吉では死者が続出、板車に乗せ戦車壕まで運んで葬るのが毎日の仕事であった。こんな悲しい仕事が二カ月くらい続いたろうか？

ところが、元氣であった私もついに発疹チフスにかかってしまった。私の近くで寝ていた数人の若者、千島から来たという腕に日の丸をつけた少年飛行兵が泣いている。新義州時代の北村憲兵軍曹、三重県出身の小木曾曹長が黒パンをもって見舞いに来てくれたが、私はこの若者に「元氣をだせ」といってパンを渡した。

死を覚悟していた私は、フト首筋をさぐると二十円の現金が縫いこまれていた。妻のフジ子が入れたのだろう。まだ残っていた日赤の看護婦に頼んで、最後と

もいえるリンゲル注射を股ぐらに打ってもらった。数日後には歩行ができるまで回復した。しかし私に黒パンを与え励ましてくれた北村軍曹と小木曾曹長はすでに死亡していた。——人の命のはかなさよ——特に北村軍曹は、三合里で夏服だった私に冬外套を着せてくれた心優しい男である。入ッ後はこの外套でマローズ（寒波）の夜、北村、小木曾を思い出して泣いたものだった。

二十一年春、延吉では皆を一行に並べて身体検査、尻の皮を引っ張って体力を調べるといふ実に原始的な診断？であり、皮の弛みで一、二、三に分類するのであった。

幸か不幸か、一で健康状態「上」と判定された。百人の隊を編成、延吉空港へと向かった。空港周辺は荒れ放題、薪を作って皆で持った。道中に使うためであり、二日ばかり歩きいよいよ連領に入る。誰かがここはクラスキノと言っていた。また二日ほど歩いた。ここで銃殺されるのではないかと不安がのぞく。満州への逃亡も考えたが半日で断念した。

百人単位で編成され、赤軍十八労働大隊と呼称し、山中の薪切り及び送電線路を作りながら、ウオロシロフに副隊長として移動した。

延吉の生活からクラスキノを経て巨大な軍都ウオロシロフに着く。ここは空軍、戦車、鉄道、国境警備隊などが駐留する国境の都市であった。我々の入る建物は、先に入っていた部隊が移動したらしい、兵舎の通路には立派なベーチカが二基残されていた。

夕方まで身辺整理の後その日は休養となり、翌日から本格的な作業が始まった、広場には旧日本軍のポンコツ自動車が百台ほど、これを分解して貨物列車に積み込む作業であった。ラーゲルで指揮者の選挙をやり、奥村元曹長が代表となった。毎日の鉄屑運びで顔が真っ黒になった。ソ連側の作業の総指揮はタタール人で、半黒の顔をし、意地悪で、しかも身の丈二メートル近い大男の曹長、肩章が日本の郵便局のマークに似ているので、われわれ仲間では「局長さん」と呼んでいた。

私は車の運転ができるので貨車積みの作業を主にし

た。驚いたことに広場の奥にはアメリカ製のスチュードベーカーという十トントラックが、更にその奥には小型の乗用車（ジープと言っていた）が百台ほど、後ろにはスクリューがついている、しかも前輪が回転する（前輪駆動）、初めて見る車であった。これらの車と初めて対面したが、シート切断事件が起き、軍法会議とハバロフスク行きのカップが身辺につきまとう結果となった。

夜のラーゲルは、いつの間に入り込んだのか、アクチブと称して五人ほどが毎夜吊るし上げを始めた。真先に私が槍玉にあげられる。「この野郎は天皇の警察官だ、この野郎をどうするか？」水ばかりのカシジャと小さな黒バンでお腹ペコペコで判定を待つ。凍結した便所の作業が五日くらい。制裁は私のみで不発に終わったらしい。アクチブ達のねらいは、元憲兵、特高、警察官などを鵜の目鷹の目で探し出し、ソ連側に通報して自分達の存在感を示すことのようにであった。ソ連人と二人で荷下ろしの作業中のことであった。硫酸の入った瓶が落ちて長靴の中に液が入った、そし

て両足を火傷してしまった。ウオロシロフの軍病院に緊急入院した。とても痛みがひどくて苦痛の日が続いた。

その頃ダモイの声も大きくなっていった。ヤボンスキーの病気は、目に見えるもの以外はなかなかウンとは言わないが、私のような怪我で、特にソ連人との間で起きた事故である。担当のドクターも親切であり、またそれ以上に美人の上級中尉である。しかも、日本の話を聞きたくてよくやって来る。

ある日マイヨール（少佐）の軍医が来て、「ソ連の女性」に手を出すなどとなりこんだ。翌日私は退院させられた。その女医さん、親切にも私をラーゲルまでジープで送ってくれた。別れぎわに軍医の名を聞いたところ「ミーシャ」と言った。ミーシャという名はソ連には五十万人はいると言った。

ラーゲルに帰ってから三日後、待ちに待ったダモイが始まった。

ウオロシロフでの抑留生活は、隊員とはうまくやっていた。百人の隊員を十人単位に班編成し、それぞれ

班長を決め、特に食べ物の分配は民主的かつ公平さをモットーとしていた。百人はガッチリと団結していたし、アクチブも一目おいていた。

アメリカ貸与のステュードベーカーに目をつけていた私は、ガラス越しに覗くと運転席のシートがピカピカである。ドアの鍵を開けて侵入、このシートを切りとった。毎夜、針金を細工した縫い針を使って上衣を作り始めた。何日かかったか、立派？に仕立てあがった。ある日、収容所のロマーノフという上級中尉に質問されて事の次第がバレてしまった。「米国貸与の、しかも新車を傷つけるとは何事か」と、物凄い剣幕でどなられた。剣ぎとったシートの生地と着ている上着の生地が一致する、弁解の余地がなかった。

入ソして何年目か、あちこちでダモイの話が出始めている。われわれのグループにも遂にダモイが実現したが、私だけが「ダモイ」の名簿から除外されている。シート剣ぎとりの件だと直感した。引率は副隊長をしていた奥村武夫（鉄道隊元陸軍曹長）である。準備万端お別れとなるが、現金なもので、ラポータに行

く時はダラダラと歩いてきた連中も、奥村の号令によってキビキビと「歩調を合わせて上杉さんに敬礼」ときた。しかも白い歯を見せて……。

隊員の中には元警察官、憲兵、裁判官、七三一部隊の者などがある。私は心の中で「早く行け、ナホトカへ」「早く帰還船に乗って日本へ」そして無事舞鶴へ上陸するように祈りながら、二十三年の十月のころ、怪我で両足に包帯を巻いていた私は、営門で松葉杖の姿で片手を上げて見送った。

残った私は、一人淋しくゲーベールウーの運転する車に乗せられ移動して、ハバロフスク行き貨車に乗った。この貨物列車は何人乗っているかわからないが、少なくとも十五人くらいいるようだ。背負い袋を枕に横になった。列車は単調な音をたてて北の方に進んでいる、私は眠ってしまったらしい。

今日のラポータは、アムール河の北岸で、置いてある石炭を捨てる作業だ。私は十五人の組長として「この石炭を二日間で全部捨てよとの命令だ。モスクワにはゼロと報告してある。明日視察に来る、少しでも残

っていると組長のお前も食事はないぞ」と脅かされる。余程事情があるらしい。食べ物は貧弱だが石炭だけは豊富にある。何で捨てるのか全く意味がわからない。

私は組員にはかり、要領よくやれば夕方までには完了すると判断した。向こうが食いものならこちらはタバコでも要求しよう——どこからかパピロスを三箱持ってきた。夕方にはカンチャイ(終了)してしまっ

た。石炭捨ての作業は予定より早く終わってしまった。近くにボロボロの外輪船三隻が係留してあり、この船のサビ落としの仕事を命じられた。日本ではカンカン虫と呼ばれ、最悪な条件の仕事である。まず二人を連れて下見をした。船内は荒れ放題、物凄く汚れている。鉄鋸、ハンマー、ペンチなど工具が散乱している。よく見ると船底はボロボロ、私は同行者とニンマリとした。この仕事は一カ月は必要だと言うと、現場主任は「ハラショー」と答えた。「ダワイ、ダワイ」のない気楽な仕事が入り、オーチンハラショーで

あった。抑留三要素？の「空腹」「寒さ」「重労働」の一つでもない方がよい。

ダモイのことは少し消えたが、でも家族や子供のことは夜のベッド？で一人思いふけるのであった。

三百トンくらいの外輪船のサビ落とし作業を始めた十時前、ゲーペーウーのセルゲー中尉が私を呼び出した。手にハガキを持っている。日本の兄からの便りだった。満州、朝鮮經由でニューギニア方面へ派遣された筈の兄（高射砲隊中尉）からだ。どうして私がハバロフスクにいたことを知ったのか、私は兄のハガキをもって泣きだした。セルゲー中尉は心配そうな顔をして私の肩に手を置き、慰めているようであった。

お互い生死不明の間柄であった。私はカタカナばかりの赤十字のハガキを見せて一通り説明をした。「あの死の島」ニューギニアからよくも生還したものと。中尉はニッコリとして再度私の肩に手を置いた。帰国後知ったことだが、兄は東京の進駐軍司令部に行き調査を依頼したのだった。

兄の便りから元氣百倍、外輪船の船底を張り替える

作業に入った。二人のソ連人と三人の日本人計五人である。船底をガスバーナーで切断し新しい鉄板と取り替えるのだ。二、三日して作業も少し馴れてきた時のこと、溶接の火花を直に見て目先が真っ暗になり、その場に倒れた。気がついた時私はラーゲルのベッドの上にいた。五日ぐらいたってどうにか目が見えるようになった。当然のことで、黒メガネを使用しなかったからだ。しばらくの間オーカー（虚弱者）となり休むことになった。

雨の日、糧秣係の中尉が私を呼び出した。食糧倉庫に行くが馬車を使えるかと聞かれ、「オーチンハラシヨール」と返事をした。

翌日、緑色に二本線入りの腕章が渡された。「この腕章は、ハバロフスクにおいてはフリーパスだ」と言われた。私は飛び上がらんばかりに喜んだが、ただしパン工場への行き帰りだけであった。

翌朝九時倉庫前に行くと、一人の兵隊（食糧関係はよく兵隊がつく）と私の二人、受領伝票を渡された。

「ダワイ、イジ（さあ出発）」鼻歌まじりに動き出し

た。

二、三百メートルを行くと同乗の若い兵士が話しかけて来た。「マダムはいるか」、私は「いる」と答えた。ソ連兵はマダムはいないと言う。「私の妻はスクールティーチャーだ、マリーリンキは男の子が一人いる、早くダモイしたい」と言うのと、同乗のソ連兵はウクライナ出身で自分も早く帰りたいと言った。「ソ連の兵士とて人の子よ」と思い、私はふと郷里の伊勢神宮に心から無事帰国できるよう祈った。

やがてパン工場に着き工場の老人に伝票を渡すと、私をジロジロと眺めニヤリと笑った。私は何故笑うのかと聞くと、老人は私の口髭を指さして、「ネコでも両方にながっている、お前のヒゲは左が下がっている」と大笑い。

外輪船の作業のガス溶接で失明寸前であった私は、半月の休養の後、パンの運搬をやっていた。

ある日のこと、新品の冬服を着た若者が私を訪ねて来た。二人は民主グループの者だといひ、深夜の会議にとパンの特配を頼んできた。しかもソ連側の証明書

を持つている。明朝渡すことを約束した。以後二、三日おきに注文して来る。その都度、夜の九時頃アクチーブのいる部屋に持参した。室内には五、六人の若者が論議しているようであったが、パンをテーブルの上に置くと、私を民主グループの大物と思つたらしく、全員が立ち上がり深々と頭を下げるようになった。その後も、ラーゲル内ですれ違つても彼等アクチーブ君は丁寧な頭を下げるようになった。アクチーブと言えども食べ物には弱い、まさに地獄の沙汰もパン次第ということである。

ある日の夜十時頃であった。アクチーブの部屋を出た時、廊下に白い紙切れが十数枚落ちてゐる。一枚を拾つて見るとこれは大変、ソ連のルーブル紙幣である。全部拾つて十二、三枚はあると思ひ、四方をクルクル見渡してポケットに入れた。私は入ソ以来ソ連のお金を見るのは初めてである。手にしたのも初めてである。このお金の拾得は誰も知らないはず、私はこの金を背負い袋に入れておいた。ところが十日くらいたつてから背負い袋を開けたら、例のルーブル紙幣とタバ

コがなくなっている。誰の仕業か調べても仕方がない、諦めることにした。

ハバロフスクのある広場の片隅に、小さなテント張りの小屋がある。政治部の将校らしい人物に呼び出された。「お前はウオロシロフで米国の車を壊したことはないか」の尋問を受けた。そのとき「ヤ、ニズナイ」と答えた。私はウオロシロフの抑留生活中にシートを切断して服を作ったことがあり、ローマーノフ中尉にどなられたことがある、注意人物とされていた。そのせいで一人だけがハバロフスクへ送られたと感づいていた。九十九人の同僚を無事送り、アクチブの吊るし上げにも耐えてきている、今更私がやったとは口が裂けても言わないと決めていた。十数回の尋問にも「ヤ、ニズナイ ヤ、ニポリマイ」で終始通し続けた。そしてとうとう赦免となった。

この二十分所には七百余人いるとか。ダモイの話もある。夕食後は相変わらず赤旗の歌声と吊るし上げが始まっている。入ソ以来五年になる、少々のことでは驚かないぞ。

二十五年一月ダモイとなり、山澄丸で舞鶴に上陸し妻子の待つ松山市に帰ることになった。

ハバロフスクでは器物破損の疑いで厳しい取り調べをうけたが「証拠不十分」で放免となる。日本を離れて幾星霜、夢にまで見た日本、「国破れて山河あり」。形どおり取り調べも終わり、旅費、被服の支給などを受けた。ところが上衣は旧海軍の水兵服、実に奇妙な姿である。千円札でセンペイを五、六枚買う。物価のことはわからない。

津市の実家から妻子の待つ松山市への旅、道中で「おにぎり」を盗まれた。連絡船のホームは長く大勢の人であり、うどんを食べるにも金は無い。四国の旅は初めてである。列車の左側は山ばかりが見える。車外はそろそろ暗くなって来た。

三津浜駅で一人だけ下車したが、誰一人いない。暫くして綿入れを着た婦人が近寄ってきた。まさか水兵服を着た人物が私とは思わなかったらしく、「妻である」「主人である」と目が合ったのはかなりの時間がかかっていた。「長いことご苦労様でした」夫婦が手

を握り合った。翌日初めて道後温泉へ。そして松山の人となり、今日に至っている。

満州からシベリアの八年

愛媛県 宇都宮 政 壽

昭和初期から七十余年が経過した。耐えることを美德としてきたが、朝鮮での生活、延吉での生活、入ッしてからのさまざまな生活、筆舌には尽くしがたい。

これは私一人ではない。南の島、中国大陸、また北の大地シベリアで、戦場化した沖繩で、広島、長崎の二発の原子爆弾で、父が、夫が、兄弟が祖国日本のことを案じながら散っていった、その犠牲者の冥福を祈りたい。戦後五十三年余り、立派に立ち直ったのもこの人たちのおかげだ。

世相も目まぐるしく変化してゆく。若者にも言いにくい。一見平和とも思うが、世界の隅々には爆弾テロなどが起き、物騒な世の中である。

「忘れまいこの体験を」。そして子や孫を通じて後世に伝えたい。

大正九年十月八日、東宇和郡笠置村（合併して石城村、現宇和町）の農家に長男として生まれる。

県立宇和農業学校（現宇和高校）在学中に肋膜炎と腹膜炎に罹病、療養生活二年半、全快後、石城村役場に一年間勤める。昭和十五年七月徴兵検査を受け、丙種に合格。

十六年九月、私立中野高等無線電信学校を繰り上げ卒業。十月一日付で満州国治安部警務司に採用され、新京の警察学校に入る。同月二十四日、通化省公署警務庁無電室勤務を命じられ着任。以後、濛江県、輯安県公署警務科無電室で無線通信士兼暗号員として勤務。十九年七月依願退職。

八月一日付で北安省北安市、北満車両株式会社に入社。同社に勤務中の二十年五月十六日、召集令状を受